

編集委員会からのお知らせ

日本公衆衛生雑誌編集委員長
上原 里 程

本年1月に発生しました能登半島地震で被災されました方々にお見舞い申し上げますとともに、被災地において支援活動を続けていらっしゃる方々に敬意を表します。会員の皆様には、平素より本誌の発行に多大なご協力をいただき感謝申し上げます。

昨年春に新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行し、国内の社会情勢はある程度落ち着きを取り戻したかに見えましたが、年明けの能登半島地震によって自然災害の脅威を改めて実感することになりました。健康危機管理はもとより、少子化等の保健医療福祉の課題は増え続けることはあっても減ることはないのではないかと考えられます。そのような状況において公衆衛生の多様な課題への取組みを論文等で会員の皆様へお届けする本誌の役割は益々大きくなっているのではないかと考えております。

本稿では、2023年に発刊されました第70巻1号から12号までの概況と編集委員会の主な取り組みについてご紹介します。

1. 第70巻の概況

掲載数58編で論文種別の内訳は特別論文5編、論壇1編、総説2編、原著23編、公衆衛生活動報告6編、資料16編、会員の声5編でした。第69巻からの推移をみますと、公衆衛生活動報告および資料はほぼ同数ですが、原著が減少傾向です。1号あたりの掲載数の範囲は4編から7編でした。なお、2023年1月から12月までの新規投稿数は108編、審査日数（該当月に投稿された新規投稿論文の「投稿から初回審査結果通知まで」の平均日数）26.7日でした。査読委員の皆様のご協力のおかげで短い日数で審査できておりますことに心より感謝申し上げます。

2. 編集委員会の主な取り組み

2024年1月には編集委員、同年4月には査読委員いずれも約半数が交代し、編集委員会が新たな体制となりました。これまでに編集委員および査読委員を担当してくださいました先生方に心よりお礼申し上げますとともに、新たにご就任くださいました先生方にはお力添えをどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、編集委員会では、これまで同様に、常時のメーリングリストによる審査に加え隔月で編集委員が顔を合わせて議論する場を設けており、審査に関連する課題や優秀論文賞、ベストレビュワー賞の選考・選出、投稿規程の改定等について議論しています。昨年実施した規程の主な見直しとして、各委員会等からの報告は「特別報告」とし「特別報告」に関する規定を設けたこと、資料に英文抄録をつけることとし公衆衛生活動報告については国際化の観点から英文抄録をつけることを推奨すること、二次出版を希望する場合の対応を追記したこと等が挙げられます。昨今の医学雑誌編集の動向を踏まえながら、会員の皆様にとってさらに投稿しやすい雑誌になるよう、投稿規程の見直しを継続的にこなしていきます。

3. 会員の皆様へ：積極的なご投稿のお願い

本誌では質の高い原著論文だけでなく、現場での活用が期待できる公衆衛生活動報告など、公衆衛生の発展に寄与できる論文を数多く掲載していきたいと考えています。そのための取組みを編集委員一同で議論しながら進めていく所存ですので、是非多くの論文をご投稿くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。